



ーリスペクト アザーズ (他者の個性を尊重する)ー

新学期が始まって、2カ月が過ぎました。生徒の皆さんは、新しいクラスや部活動で自分らしさを出して生活できているでしょうか。ちょうどこの時期は人間関係のトラブルが私たち教職員の耳に届きます。自分のことをよく思っていない友達の心ない言動に接したり、友達の上から目線の言動に嫌気がさしたりして悩んでいる生徒からの相談が少なからず舞い込みます。

皆さんは、童謡の「ぞうさん(作詞 まど みちお、作曲 團 伊球磨)」を知っていると思います。

ぞうさん ぞうさん おはなが ながいのね
そうよ かあさんも ながいのよ
ぞうさん ぞうさん だれが すきな
あのね かあさんが すきなよ

この歌に込められた作者の思いについて、『まど・みちお詩集 ぞうさん』の編集者の田中さんが、「あれ?これって子どもの歌でしょ?子どもが歌う歌じゃないですか」と、作詞したまどさんに尋ねたとき、まどさんからの次のような返事が返ってきたそうです。

「これはね、象の子どもが、森の仲間たち、ライオンや熊やリスたちから『やーい、きみの鼻は長くておかしいや』とからかわれたのです。すると象の子どもは、そうだよ、ぼくの大好きな母さんの鼻だって長いんだもん、といって自分の長い鼻を空にかかげて自慢した。という歌なんです」と。

まど みちおさんは、戦争中に悲しい出来事に出合ったそうです。それは、日本に來られた外国の人への差別でした。同じ人間なのに、なぜ差別をするのだらうという思いから、童謡の「ぞうさん」は作られたそうです。

また、金子みすゞさんの「私と小鳥と鈴と」という詩があります。

私が両手をひろげても、お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、地面を速く走れない。
私がからだをゆすっても、きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように、たくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。

この作品は、多くの人々が一度は読んだり、聞いたりしたことがある有名な詩です。金子みすゞさんにとっては、「小鳥」も「鈴」も自分そのものであり、優劣をつけるという考え方はありません。また、命ある「私」や「小鳥」だけでなく、命のない無機物の「鈴」までも同じ重さを持つ存在とする考え方や、もっと言えば、地球上のすべてのものは存在している、ただそれだけで価値があるという考え方から、命ある、なしは全く関係なく、どちらも尊いというメッセージがこの詩に込められています。

金子みすゞさんのその思いが、作品「わたしと小鳥とすずと」のなかで、「みんなちがって みんないい」という言葉で、みんな違うことが当たり前で、みんな違っていい、と結んでいます。同様に、まど みちおさんは、童謡「ぞうさん」を通して、違うことこそいいんだよ。違うことをバカにしてはいけない、と伝えています。

私たちが集団のなかでお互いが安心して生活を送るには、他者の個性を尊重し、互いに認め合う姿勢をもつことが大切です。そして、自分自身も自分のことを好きになり、自分らしさに自信を持って生活してほしい、と願います。

今日から2年生は、トライやる・ウィークで地域の事業所で活動しています。大人も職場の人間関係に気がつかいながら、同僚の個性を尊重し、お互いのよさを認め合いながら働いています。トライやる・ウィークの活動が終わったあとに、このような事業所の方の心づかいが感じられた場面がなかったか、と振り返ってもらえたら幸いです。

私たちが日々生活する学校での人間関係をどうするかは、当事者である生徒の皆さん一人ひとりが考えてよりよい人間関係をつくっていかねばなりません。その際に、他者の個性を尊重しているか(Do you respect others?)と心にとめて考えることが必要です。どうか当事者意識をもって、よりよい人間関係を築ける自分を、「在りたい自分」の目標のひとつにし、学校生活を送ってほしい、と強く願います。